

## ローマ 8 : 26-31

この朝お読み頂いたローマの信徒への手紙 8 章は、ローマ書全体の中で、クライマックスに当たるところです。ベートーベンの交響曲 9 番、あの「第九」が、最後の第 4 楽章の「合唱」のところで頂点に達するように、ローマ書は本日の 8 章でクライマックスに達します。8 章は、それまでの 1 章から 7 章までの教理的な説明を総括し、イエス・キリスト、聖霊、神という神の 3 つの位格をすべて登場させて、キリスト教信仰の神髄（エッセンス）を説き明かしている章です。8 章は、内容的に大きく 3 つの段落に分かれます。最初の段落は、私たちをあがなったイエスキリストの霊、聖霊がテーマとなり、そこでは、わたしたちの死すべき肉体を復活の命の体へと変えてくれる霊の力、聖霊の働きが記されています。2 つ目の段落では、被造物全体が神の子の出現を待ち望みつつ呻いているという文脈のなかで、御霊もまた、同じように切なる呻きをもって弱い私たちを助けてくださることが語られます。そして、最後の段落では、いっさいのこの世の力に勝利し、私たちを引き離すことのない神の愛が高らかに歌い上げられるのであります。

本日お読み頂いた 8 章の 26 節以下は、8 章の 2 つ目の段落の後半部分になります。26 節を読みます。「**同様に、霊も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが言葉に表せないうめきをもって執り成して下さるからです**」「同様に」とありますが、何と同じなのでしょう。それはこのあと、「**霊自らが言葉に表せないうめきをもって**」とあるように「うめき」が同じだと言っているのです。22 節に「被造物がすべて今日まで、共にうめき」とあります。また、つづく 23 節には「被造物だけでなく、わたしたちも心の中でうめきながら」とある。すべての被造物だけでなく、わたしたちもまたこの地上における生を苦闘のなかで、うめきながら生きているとパウロは言います。同じように、御霊ご自身もまたうめいているとパウロは言うのです。現代に生きるわたしたちはどうでしょうか。コロナ感染症の第 5 派の襲来、感染拡大のなかで、またもや緊急事態宣言が発動され、発動にともなう営業時間の短縮、会食の禁止、県をまたぐ移動の禁止などさまざまな行動規制がなされる、そんな困難な時代を生きています。教会も同じです。クラスターが発生しないようにできる限りの感染防止策を講じながら、それでも、不安や恐怖感をいだきながら、礼拝をささげている。教会で何かを決めようとしても、対面ではなくメールによる意見交換では真意もなかなか伝わりません。何かと苦労が多い。そのような弱さをかかえるわたしたち人間の現実を、手紙の著者であるパウロは、2000 年前の昔から見通していたのです。

このような弱さをかかえる私たちにむけて、パウロは、まず初めに「祈ること」の大切さを訴えます。文頭に「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが」とありますが、原文は「わたしたちは、何をどのように祈るべきかが分かっていない」と書かれています。パウロは、「祈ることが出来ない」というわたしたちの霊的などん底体験、信仰者の現実が分かっていたのです。祈りを妨げる要素はいくつもあります。「自分のからだの弱さ」、「精神のもろさ」、「次々と襲い掛かってくる試練」、そして何よりも「信仰が弱りはてること」それらによって、祈ることが出来なくなるのです。しかし、P. T. フォーサイスという神学者は「祈りの精神」という本の中で次のように言います。「もし、祈るのが嫌に思えるときは、あなたは一層祈るとよい。(略)・・・食欲が食事によって生じるように、祈りへの欲求も祈りによって生じてくるのである」どんな言葉でもよい、あなたが心の中に抱く思いを、素直にありのままに神さまにぶつければいいのです。祈りを通して、神さまに自分の思いを伝えなければ、神さまが働いてくださるはずがありません。たとえば、皆さんが夜の海を小さな船に乗って航海していたとします。ところが、突然の暴風雨によって大波が船を襲い、船は転覆し、あなたは海の中に投げ出されたとしましょう。しかも、その海は、時折サメが出没するような危険な海だったとします。つめたい海での体力消耗を避け、溺れないようにして泳いでいたら、しばらくして視界に救助艇のライトが見えてきたとしましょう。あなたはどうしますか。「おーい、助けてくれ」「ここよ。助けて！」絶対そのように、大声で叫ぶに違いないのです。祈りとは、このような叫びを叫ぶことです。神を信じるとは、このように私たちが苦難の中にいるとき、神がそばにいて下さり、助けの手を伸べて下さることを確信するということです。それなのに、わたしたちはどう祈っていいか分からないとパウロは言うのです。どういうことでしょうか。それは、わたしたちが目に見える他のもの、神以外の物により頼んでいるということです。神に求めているのではありません。「神は無力だ」と思っている、それよりもっと有力

に思える他の助けにより頼んだほうがましだと思っているのです。だから祈ることが出来ないのです。思うに、心底深く、心の深みから神さまに頼むそのとき、祈り方がわからないということなどあるはずがない。簡単ですよ。「神さま、助けてください」それで十分なのです。そう考えると、パウロがここでいう「弱さ」とは神を信じ切れない、不信仰な私たち人間の姿を指しています。神に求めることが出来ない人間、心の中に神を持っていない人間。私たちの「弱さ」とは、頼るべきお方としての神を持っていないことではないでしょうか。逆に、わたしたちが神を心のうちに持っていれば、私たち強いのではないのでしょうか。「力は弱さの中で十分に発揮される。なぜなら、私は弱い時にこそ強いからである」(第2コリント12章9節以下)とは、そのことを言っていると思われるのです。

御霊の働きの一つ目は「うめき」でしたが、パウロはもう一つの働きを述べています。それは「執り成し」です。執り成しとは何か、それはある人のために代わって祈る、代わって請願するということです。それは信仰者に与えられた特権ではないでしょうか。その原型(最初のかたち)は、創世記18章でアブラハムがソドムとゴモラのために祈った祈りに見ることが出来ます。アブラハムは、あそこでこの町に10人の正しい人がいたら、その10人のために町全体を滅ぼさないでくださいと主に嘆願しました。これを聞いて、主は言われます「その10人のために、わたしは滅ぼさない」しかし、現実にはソドムとゴモラは滅亡してしまいます。この町に義人、正しい人は恐らくひとりもいなかったのです。キリスト者の大切なつとめは、この執り成しの祈りをささげることではないでしょうか。だれかが人生における厳しい現実、不条理を体験したとき、私たちはその人の気持ちを分かることなどできない、そう思います。何の力にもなってあげられないのです。しかし、力を落としているその人に代わって祈ることはできる。アブラハムがソドムとゴモラのために祈ったように、御霊自らが私たちのために祈ってくださるというパウロの言葉は、慰めに満ちています。神の霊が、私たちの祈りにうめきをもって介入してくださるのです。先週の日曜礼拝の説教の中で、わたしは、14年前に松村先生が辞任され、当教会が無牧となったときに立ち上げられた牧師招聘委員会が、次期牧師としてどのような方に来てほしいか、という内容で教会員にアンケートを募ったところ、さまざまなリクエストが寄せられて、結果的に收拾がつかなくなってしまった、ということがあったことをご紹介しました。しかし、そのアンケートに今私が答えるとしたら次のように応えます。祈りを大切にする人、一人一人のために心から祈って下さる人であってほしいと。なぜか、それは、人生には祈りによってしか解決できないような問題があるからです。

では、そのような祈りの結果、何が起こるのでしょうか。それが次の28節に書かれています。「**神を愛する者たち、つまりご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています**」この文章の主語は、「万事=すべて」です。神を愛する者にとっては、すべての出来事が神の御業として受け止められるときに、益となる。すなわち、救いのための善き出来事となるという事です。ここで益となるとは、善いものに変えてくださるという意味です。神はわたしたちに御霊を送ってくださるだけでなく、私たちの周りで引き起こされるすべての事を共に働かせるのです。そうして、すべてを善いものに変えて下さるのです。旧約聖書の詩編119篇71節には、つぎの言葉があります。「**苦しみにあったことは、わたしには良いことです。これによって、わたしはあなたの掟を学ぶことが出来ました**」苦しみに会ったことは、自分にとって良い出来事だったと詩人は告白しているのです。なぜ、そう言えるのか。それは、この詩人が神を愛し、自分に起こった出来事を神のなさる御業だと受け止める信仰を持っていたからです。その信仰ゆえに、自らの苦難の体験を自らの成長のための肥やしにすることができたというのです。

すばらしい信仰告白ですね。万事が益に働くためには神とその愛に心の目が開かれなければなりません。わたしたちの弱さを通して神の愛を学び、私たちの苦しみや試練を通して神の深いみ心を悟るのです。

いま、わたしたちの教会は、大きな変動の時を経験しております。牧師の退任という出来事は、一つの教会にとって確かに大きな出来事であり、しかし、あえて挑戦的な言い方をさせて頂くならば、一人の牧師にとってAという教会からBという教会に赴くという事柄は、その牧師の生き方、生を揺り動かすような決定的な出来事ではないというべきです。牧師の生を揺り動かす出来事は、「わたしが示す地にゆきなさい」というような確かな主の御声を聞くこと、すなわち神の言葉なのです。じつは、教会も同じことが言えます。教会を根底で支えるものは、特定の個人ではありません。いつ、どのような時代にあっても、教会の主であるイエス・キリストとそのみ言葉、すなわち神の言葉なのです。栗ヶ沢教会に行っても、わたしは特別に変わることはないでしょう。一方で、この大泉教会もこれまで通りの救霊に燃え、一人一人の救いを大事にす

る、伝道的な教会であり続けて頂きたいと思います。目を開いて、神のなさる次のみ業を見てゆきましょう。  
主がわたしどもに託された神の国の建設のために、なすべき務めを精一杯果たしてゆこうではありませんか。  
お祈りいたします。